ビジネスサポート通信

第４５号（全１７ページ）
発行日　平成２９年１０月　１日（日）
発行者　特定非営利活動法人 ビジネス・サポート
〒107-0062
東京都港区南青山５丁目１番 25 号
TEL　03-6418-8108　FAX　03-5485-1395
eメール:nbs@aroma.ocn.ne.jp
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ：　http://geo.npo-bs.net/

目　　次

【随想】
オペレッタって楽しい!!　1
【お知らせ】
活動報告＆伝言板　4
【ご案内】
ＮＢＳ秋季講演会の開催　5
【連載コラム】
地場産業の力強さ（２回シリーズ中第２回目）　7

【随 想】

オペレッタって楽しい！！

リンクパワー株式会社　　代表取締役
特定非営利活動法人ビジネス・サポート　　会員
木庭　稔雄

このところオペレッタにはまっている！

初めてプロの演じるオペレッタを鑑賞したのが平成２６年１月のことだから３年８ヶ月ほど前からということになる。通算でこれまでの人生の２０分の１ほどのことなので、まあ最近のこととしておこう。

その時は、ムジカ・チェレステというグループ主催の「ルクセンブルク伯爵」を観た。あの有名な「メリーウィドー」の作曲者レハールの作品である。３組のカップルがもつれあいながら結婚にゴールインするという他愛もない恋愛ストーリーなのだが、歌と踊り（と台詞回し）で軽快にテンポよく展開されて実に楽しい。オペレッタがミュージカルと違う特徴は、基本的にマイクを通さない（ＰＡを使わない）生音で演奏されることにある。そのため歌手は歌にエネルギーを費やすので、一般的には踊りや芝居に力が注がれないことになる。しかし、ムジカ・チェレステはダンスにも芝居表現にも手を抜かない。だから“面白い”と私は思う。

その面白さに魅かれて、他に魅かれた人達と一緒にムジカ・チェレステの代表である佐藤智恵さんを焚き付けて“個人でオペラ・オペレッタの主催を継続して行くのは無理があるから”法人化して株式会社ムジカ・チェレステを同年５月に設立し、その夏に行き掛り上同社の非常勤取締役に就任してしまった。

微力ながらオペラ・オペレッタの制作の手伝いをさせて頂いて痛感するのは、出演者を始めとする関係者が決して儲け仕事として携わっているのではないということである。特にムジカ・チェレステで行っているような本国からの楽譜の入手やオリジナル台本の作成からはじめて、チラシ・チケット・プログラムのデザイン・印刷・配布・販売、会場・出演者のブッキング・稽古手配・（踊りの）振付、衣装・大道具・小道具・照明・音響その他もろもろ考慮すると膨大なコストと労力を要する。

プロデュースをしているムジカ・チェレステが、厳しいコスト負担に耐えながらオペレッタ制作

に携わっているので当然のことながらどこかにしわ寄せが生じることになる。会場費その他の費用は定額であることが多いので必然的に出演者を含む人的経費にプレッシャーがかかることになる。オペラ歌手も出演して良い公演を創り上げたいという純粋な気持ちがあるものだから、名の通った主役級の方でもチケットの販売ノルマを背負って引受けてくれることすらある。あまり多くを明かす訳にも行かないが、台本作成・ダンス指導・歴史文化的な背景の教育指導などボランティアで協力してくださる方々が大勢いらっしゃる。エンターテインメント・クラシック®を標榜してオペレッタの裾野を広げようとしているムジカ・チェレステの公演は、そうした市井の人々の多大なるご支援の賜物で成立している。

ついでに言ってしまうと、文化庁傘下の芸術文化振興基金には毎年本公演について助成金を申請しているが採択されたことがない。不採択の理由も教えてくれないので何とも言えないが、申請書を作成するにも相当の労力を要している。公的支援とは何のためにあるのか疑問に感じてしまう。

ムジカ・チェレステは、毎週木曜日夕刻に尾形記念木曜コンサートを行っているが、題名の通り尾形充宏さんという方個人に支援して頂いている。このコンサートで毎週違ったクラシック（たまにはポップスやジャズ系とのコラボもあるが）の歌手や楽器奏者をブッキングすることで外部公演を支えるアーティスト群の基盤となっている。こうした篤志家の方々のお志には、本当に頭が下がる。

実は、私もオペレッタに出演したことがある。それも二度！一度目は、出身校である小山台高校２年の文化祭で「真間の手児奈（てこな）」という出し物で「くず人（ひと）」という準主役級の役でいきなり出演して大声で歌い観客を驚かせた記憶がある。このオペレッタは、和物であるが、主役が海に身を投げて死んでしまうという悲劇であった。オペレッタでは人が死なないのが原則なので、そもそもオペラとして作られたものを上演時間が短いのでオペレッタと称したものであったのかもしれない。

二度目は、今年６月に淡島ホテルという伊豆半島にあるリゾート・ホテルの音楽ホールで「チャールダーシュの女王」を演奏した時に予算と人繰りの関係でローンスドルフという端役を仰せつかった時である。「チャールダーシュの女王」は、ムジカ・チェレステの看板とも言えるオペレッタで昨年５月に花やしき座で佐藤智恵主演により初演・１２月に再演した。ホテル主催のミニ公演であるがこれで３度目、その後７月１５日には浅草オペラ１００周年記念事業第１弾として増席したうえで満員御礼の第４回公演を行った。来年４月には、豊洲シビックホールで第５回公演（２組２日間）を行う予定である。

話が逸れたが、淡島ホテル公演は泊り掛けの仕事で夕食・朝食付きで富士山を眺める露天風呂も楽しめるという（私には）美味しい話であった。ほどよい緊張感に捉われながらセリフも噛まずにチョイ役を演じきった訳であるが、フィナーレやお客さんのお見送り挨拶には何となく遠慮して出なかった。

しかし、夕食後に露天風呂を楽しんでいたら、後から入ってきた宿泊客に「出演されておられましたよね。感動しました。」などと話しかけられ、四方山話に花が咲き、こちらが感激してしまった。

さらに翌朝も同室の出演者とテラスで朝食を摂っていたら、前夕の観客が何組も向こうから「感動した。また公演して欲しい。」と挨拶に来られるではないか！こんな素人だが、これは役者冥利に尽きる。楽しいなんてものじゃない。前日フィナーレとお客さんのお見送りをしなかったため、観客の感動を見たり直後の感想をお聞きすることが出来なかったことを心底後悔した。佐藤さんからも「出れば良かったのに」と言われてしまった。とにもかくにもアーティストの気持ちの片鱗が、わかった気がした。

お客さんに楽しんで頂き、感動して頂くこと、ノリノリの手拍子を打ち・嵐のようなブラボーの掛け声を頂くことは、アーティストの生き甲斐なのだと、初めて身をもって理解した次第である。

そのムジカ・チェレステ渾身の力作「オペレッタ Miss シカゴ公爵」公演が、本年１１月８日（水）・９日（木）に渋谷区総合文化センター大和田・伝承ホールで開催される。本邦プロ初演ということでドイツから楽譜を取寄せ、もちろんオリジナル台本で一から手作りのエンターテインメント・クラシック®を追求した楽しいものとなることは、間違いなし。歌に踊りに、毎日のように稽古に励んでいるアーティスト達の晴れ姿を是非観に来て欲しい。

【お知らせ】

活動報告（7月1日～9月30日）

平成２９年　７月　１日　　ＢＳ通信（第４４号）発行

７月１１日　　２１世紀中小企業勉強会（第 27 回）　商工会館７階

「中国の水事情と水関連政策」

講師　大塚健司氏

日本貿易振興機構アジア経済研究所

新領域研究ｾﾝﾀｰ環境・資源研究グループ長

７月２７日　　ＶＳネット会議（第 19 回）　商工会館７階

８月２４日　　第２９－３回理事会開催

９月１４日　　第２９－４回理事会開催

９月１４日　　２１世紀中小企業勉強会（第 28 回）　商工会館７階

「アジア中小企業の課題と連携の可能性」

講師　黒瀬直宏氏

嘉悦大学教授

「日本･アジア中小企業のものづくり･ひとづくり協力事例」

講師　佐藤正文氏

ＮＰＯ法人アジア中小企業協力機構専務理事

伝　言　板

■ＮＢＳ会員の募集

新しい会員を随時募集しています。

お知り合いの方のご紹介をお願いします。

・問い合わせ、ご連絡は

担当　橋本　　tel　090-9304-3108

e-mail　hashimoto.13530.shizu.sakura@catv296.ne.jp

■地域情報の提供

ＮＢＳにおいて、全国各地の中心市街地、商店街の再生や活性化、まちづくり等の支援を進めています。相談、支援を必要としている地域、勉強会の講師やまちづくりの専門家、アドバイザー等の派遣を希望されている地区がありましたら、下記までお知らせください。

・問い合わせ、ご連絡は

担当　椿本　　tel　090-3220-8809　fax　03 - 5485 - 1395

e-mail　aps-tbk@eos.ocn.ne.jp

【ご案内】

ＮＢＳ秋季講演会開催のご案内

ＮＢＳ恒例の「秋季講演会」を下記のとおり開催します。講演テーマを“まちづくり”とし、街なか再生の事例とこれからの商店街と関連政策について、お二人の講師の方からご講演いただきます。

ご多忙中とは存じますが、多数の方のご出席をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

記

１．日　時　　平成２９年１０月１２日（木）　１５：００～１８：００

２．場　所　　商工会館　６階Ｇ会議室

東京都千代田区霞ヶ関 3-2-5　　電話：03-3581-0121

交通：地下鉄　銀座線　虎ノ門駅または

千代田線・日比谷線・丸の内線　霞ヶ関駅

３．テーマ及び講師

講演①「クリエイティブタウンと石巻市の街なか再生」

西郷真理子氏　㈱まちづくりカンパニー・シープネットワーク代表取締役

一般社団法人クリエイティブタウン推進機構　　専務理事

講演②「新たな商店街政策のあり方検討会の中間とりまとめの報告」

早川ちひろ氏　中小企業庁商業課中小小売商業第一係長

４．進　行　　講　演　　15：00～17：00

懇親会　　17：00～18：00

５．参加費　　一般　3,000 円

会員　2,000 円

６．申　込　　参加いただける方は、別紙（次ページ）申込用紙によりお申し込みください。

特定非営利活動法人ビジネス・サポート　宛

NBS 秋季講演会参加申込書

平成２９年１０月１２日（木）開催の
ＮＢＳ秋季講演会に参加を申込みます。

平成２９年　　月　　日

参加者

氏　名	所　属	連絡先	会員非会員の別
			会員・非会員
			会員・非会員
			会員・非会員
			会員・非会員
			会員・非会員

参加申込書は、下記に送信、送付をお願いします。

e-Mail ：hashimoto.13530.shizu.sakura@catv296.ne.jp
または　FAX ：043－461－6836

【連載コラム】

地場産業の力強さ
（２回シリーズ中第２回目）

鎌倉マネジメントラボラトリー　所長
青山学院大学経済学部　非常勤講師
（ＮＢＳ会員）
植嶋　平治

＜前回＞
第１節　はじめに
第２節　福山の地場産業
１．福山の歴史的風土と産業分析
２．産業発展の成功パターン分析
３．福山の産業系譜
４．福山の繊維産業の起源―備後絣

第３節　福山と浜松－地場産業の比較分析

１．浜松の風土

浜松藩は、浜松城がかつて家康が居城し、同藩経験藩主が老中や京都所司代など幕府の要職を多く務めるなど、出世コースの名藩といわれた。また城主が頻繁に国替えになったことでも知られる。福山藩との大きな違いは、同じ譜代の藩主でも、周囲は譜代に囲まれ、藩主は頻繁に入れ替わり、そのたびに家臣や教育の要である藩校も入れ替わり、各地の文化や風習が伝わって、外に開かれたマインドが形成されていた。この点が外様に囲まれ、藩主の入れ替えも多くなく、全て藩内で賄おうとしていた福山藩と異なる。しかし、明治維新後は両藩とも廃藩となって、地方政府とは一線を画した点は共通している。この違いと、共通点が両藩の産業系譜にそれぞれ反映されることになる。

２．産業基盤の比較

浜松の産業系譜は福山のそれと極めて似ている。浜松もかつての地場産業である繊維産業から織機、そして現在では、ホンダ、スズキ、ヤマハといった自動車産業、ヤマハ、カワイなどの楽器産業、

浜松ホトニクスなどの光ビジネスなどを生み出している。また、江戸時代歴代の藩主は譜代であった点も共通している。

まず、地場産業である製造業の産業規模の比較を行うと、浜松が総付加価値額約 680 億円、これに対し、福山は約 270 億円と浜松が福山の約 2.5 倍、事業所数では浜松が 2,244、福山は 1,297 の 1.7 倍、総従業者数では、浜松が 72,349 人と福山の 38,032 人の 1.9 倍の規模である。全体として浜松は経済活動において福山のほぼ 2 倍といったところである。（図表 3-1、3-2、4-1、4-2）

ここで注目するのは上位 10 業種の分布度合いである、浜松では自動車関連（運送用機器）の業種が付加価値額の 55%を占めており、スズキ、ヤマハはじめそのサポーティング・インダストリ―のすそ野が広く、事業所では 20.7%、従業者では 33.5%、を占める。これに比べ、福山は、ＪＥＦ等大企業も立地しているが、上位 4 社で 10 数%ずつと上位 10 業種でも圧倒的シェアを持つ業種というのがなく、バランスのとれた構造になっているといえよう。

業種の分布であるが、浜松にあって福山の上位にないのは「電子部品・デバイス・電子回路」「情報通信」、福山にあって浜松の上位にないのは「繊維」「汎用機械」となっている。楽器はその他製造業に入っているのでここでの比較はできないが、浜松には楽器産業が産業系譜の重要な役割を演じている。また、福山でも楽器製造では琴が福山箏として日本の生産の 70%を占める産業が存在し、前節とりあげた日本ホイストの木工機械が大きく貢献しているが、この楽器からの浜松にみられるほどの産業の展開は認められない。[6]浜松の特徴は後ほど見るように産業系譜の中で、「光」の産業が入っていることから「電子部品・デバイス・電子回路」「情報通信」の産業も発達しているといえよう。また福山では依然「繊維」が産業の基盤の一部を担っていること、また「汎用機械」といった工場運営に不可欠なハードに強い産業が存在する。

付加価値で福山と浜松に共通しているのは何と言っても「生産用機械」である。福山では 1 位で 39,217 百万円（14.5%）、浜松では第 2 位で 53,6441 百万円（7.9%）と重要なポジションをしめており、先ほど福山で考察したように、浜松でもマザーマシン化の流れがあるのが注目される。ちなみに生産用機械 1 事業所当たりの付加価値をくらべると、浜松が 200.9 百万円に対し、福山が 213.1 百万円と福山が製造している生産用機械の方が高度なものであるようだ。また、同じく従業者 1 人当たりでも浜松 7.7 百万円（全体 9.3 百万円）、福山 9. 5 百万円（全体 7.1 百万円）となり、福山で生産されている生産用機械の価値の高さがうかがわれる。まさにオンリーワン戦略であるといえよう。

３．産業系譜・風土の比較

浜松においてもほぼ福山と同じようにかつては主に繊維産業が源流となって、産業系譜が流れている。織機づくりから、工作機械、軍需産業を経て今日の自動車産業につながっている。（図表 2）

図表 5 は浜松と福山を産業の観点から整理したものであるが、先ず共通点については、江戸時代譜代が藩主であったこと、明治に入り藩が消滅し、地方中央政府からも距離を置き、独立独歩の姿勢を守り続けていること、仕事を単にこなすのではなく、戦略的により安定しかつ増収につながる事業に転換するベクトルが働き、その結果生産用機械へのいわゆるマザーマシン化という現象である。

一方全く正反対の箇所は、藩時代の藩を取り巻く環境で、福山は周囲が外様であったことから外部に頼らず、自分達ですべてこなさねばならなかったが、浜松では藩主はじめ人の出入りが多く、いわゆるよそ者が起爆剤となって地場産業が変遷してきた経緯がある。このことから同じ土俵での

企業間競争は激しく、これがまた浜松の産業発展につながっている。先に考察した付加価値で見た産業構造の福山と浜松の違いは、域内での競争の結果がもたらしものと考えられる。つまり、競争の結果付加価値の最も高い産業に企業が集まるためで、それ以外の産業もこれらと何らかのビジネス関係をつなぎながら次の事業展開をうかがっているというのが今の浜松の姿といえよう。

福山と浜松の決定的相違は、両者とも地方中央政府から独立した意識で事業展開をしているものの、浜松は広く人材を外に求め、敢えて地域に競合を引き起こし、進化させているのに対し、福山では競争は福山の外で行い、福山内はあたかも一つの企業体＝独立国家としてお互い協力し合う点である。江戸時代の藩のおかれた状況の違いが風土の違いをもたらし、この違いが今日でも脈々と継承されている。

これからの地方創生の場合、「福山モデル」か「浜松モデル」なのか。地域の産業基盤や歴史的背景にもよるが、限られた資源の中での戦略が求められるとすれば、やはり「福山モデル」が地方創生の典型的なビジョンとなるだろう。

第４節　福山モデルと地方創生

１．島根県の離島―海士町の力強さ

福山にみられる企業群をひとつの地場産業企業としてとらえ、福山の風土がその地場産業にどのような影響を与えて来たかを考察してきた。その風土とは江戸時代の藩制が大きく影響を与え、福山を一つの独立した地域のようにとらえ、域内ではオンリーワンを目指し競合関係を発生させず、域外でナンバーワンを目指して域外企業と激しく競争するというものだった。これは、同じ産業系譜で藩制の影響を受けて独自路線ではあるが、外に開かれ、企業間の競合をエネルギーに発展させる浜松とは決定的に相違する点であった。

ではここで福山モデルに関連させて、「島」における地場産業の活性化により、地域創生を成し遂げた事例を考察しよう。それは島根県の北 60 キロ沖合に浮かぶ離島、隠岐諸島の中ノ島を町域とした人口 2,400 人の海士町である。鎌倉時代には後鳥羽上皇が流された程の地、それがこの 10 年間で 400 人を超える若者たちがＩターンしてきている。そしてこの島では、移住してきた「若者」と地元の住民とが共同で特産物の開発に成功し、立派に仕事をつくっている。(図表 6)

こうして、次々に島へ人、仕事を誘引することに成功。移住者と地元住民が作り上げた地場産業のブランドとして、年間 2 万食も売れる「サザエカレー」、ＣＡＳ（細胞を生かしたまま凍結する装置）で鮮度を落とさず出荷する「いわがき春香」そして畜産業に転じた地元建設業者による「隠岐牛」などである。また過疎化で廃校の運命をたどっていた地元唯一の高校（島根県立島前高校：地図参照）へ外部から教師を招き、カリキュラムを一新、大学進学コースを設けるなどした結果、新入生は 2016 年には、過去最低であった 2008 年の 28 名から 65 名と急増、新入生の 40%は東京、大阪からの地方留学生であり、なかには、家族で教育移住する人もできている。海士町では教育も地場産業である。

このように、海士町はまず、「ひと」と「もの（＝仕事)」づくりから着手し、その結果、過疎の離島から、世界からも注目される「地方創生」先進地域に生まれ変わった。

海士町の成功の鍵は何か。キーワードは、海士町長の山内道雄氏はじめ、島で事業を展開している人の口から出る「外貨獲得」だ。とにかく島の産品を輸出し、島を活性化させるという発想だ。この外貨獲得により、人も仕事も引き寄せられる。まさに、海士町は福山モデルを実践しているとい

えよう。島を一つの独立国家のようにとらえ、島内においてはオンリーワン企業を目指し、企業間は協力、同じ土俵には上らず、島の外に向かってあたかも輸出をするかのように競争を展開している。

２．福山モデルのコンセプトは「輸入置換」と「インプロビゼーション」

都市研究家で地域自立の先駆的処方箋「発展する地域　衰退する地域」の著者であるジェイン・ジェイコブズ（J. Jacobs）によると、かつての都市国家ベネチアは、主力製産品であった塩を対価に当時交易の中心地であったコンスタンチノーブルから生活必需品から高級品までを輸入に依存していた。輸入品の中に例えば後のベネチアの主力産業となる造船に欠かせない木材裁断用具があったが、次第に自分達の手で作り始め内製化、さらに他近隣地域とも共生的な交易を拡大していくことにより、ベネチアの技術力が高まり、雇用も生まれ、大いなる繁栄をもたらした。この当初輸入していたものを自国で内製化することをジェイコブズは「輸入置換（substitution)」と呼び、地域住民の臨機応変な創意工夫を活かす過程をジャズ用語で即興演奏や即興曲を意味する「インプロビゼーション（improvisation)」と表現している。この「輸入置換」と「インプロビゼーション」の存在が自立する地域の要件という。[7]

海士町をかつてのベネチアになぞらえれば、「輸入置換」に相当するのは、輸入したＣＡＳ装置を使うことで、商品価値の上がった「いわがき春香」の養殖や、それまで鮮度が落ちやすく島内で消費するしかなかった「白イカ」の出荷である。山内町長はこの外貨獲得を地産地「消」でなく、地産地「商」と表現している。また、「インプロビゼーション」は、外貨獲得に向けた島の地元住民とＩターンしてきた若者との息のあった取り組み姿勢である。

次に福山をかつてのベネチアになぞらえれば、「輸入置換」に相当するのは、例えば大企業との取引から技術を磨き、最初はライン整備であったのが、生産ライン装置を自ら製作して販売する、あるいはいままで購入していた工作機械を内製化し、今度はそれを販売することである。また、「インプロビゼーション」は、福山でのオンリーワンを目指しての創意工夫や、同業組合での先輩経営者による若手経営者への指南などがあげられる。

第５節　おわりに

いかに地場産業を活性化、育成すれは地方創生に貢献できるかという問題意識から、福山藩をルーツとする福山地区ものづくりの一群を地場産業としてとらえ、その経営者、従業員、市民レベルまで浸透・継承されている風土としての「福山モデル」を考察してきた。それは、地域の仲間から指南を受け創意工夫しながら、地域でオンリーワン、地域の外には輸出のイメージでナンバーワンを目指すことである。

このような発想が新たな「地域創生」の大いなるヒントになる。福山、海士町、ベネチア、に共通するのは輸入置換であり、それによる外貨獲得の発想である。つまり外貨獲得には、あたかもその地域が独立国家のような国家経営感覚を持ち、輸出貢献企業の育成を推進することにある。

ここで、先に登場したカイハラの歴史に注目したい。デニム生産で日本の 60%、日本のデニム輸出で 70%を占め、名実ともに地域でオンリーワン、日本でナンバーワンとなって、「カイハラ」を世界ブランドまで成させたものはなにか。生産機械を自社開発するという典型的な福山モデルである。この絣からデニム生産に事業転換したカイハラの軌跡を振りかえる。

50 年前、絣の需要減から絣から主にイスラム教徒が着ていた「サロン」と呼ばれる衣料向けに絣

を改良、順調に輸出量をのばした。だが、1967 年南イエメン人民共和国が英国支配から独立したことから外国為替市場が混乱、「サロン」輸出は停止を余儀なくされた。経営難に陥った当社を懇意の地元縫製会社の社長が訪れ、ジーンズの生地であるデニムの生産を薦めた。…それまで日本のデニムメーカーは綿糸を芯まで染色していたのでジーンズをはき込んでも色落ちせず、独特な風合いを出せなかった。そこで調べてみると本場米国ではたて糸をロープのように束ねて染色していることが分かった、…当社は 1970 年この「ロープ染色」ができる機械を開発。1973 年…世界的ジーンズメーカーのリーバイスに採用され、世界市場で認知された。[8]

今日のデニムのカイハラを作り上げたのは、福山の繊維仲間の貴重な指南であり、専用機械の自社開発など創意工夫、つまり、ジェイン・ジェイコブズのいう「インプロビゼーション」である。

福山の地場産業の力強さはこの「インプロビゼーション」とそれによって推し進められるマザーマシン化である「輸入置換」である。地方創生においては、ジェイン・ジェイコブズのいう福山モデルに見られるこの「輸入置換」と「インプロビゼーション」を実践することが成功へのポイントといえよう。

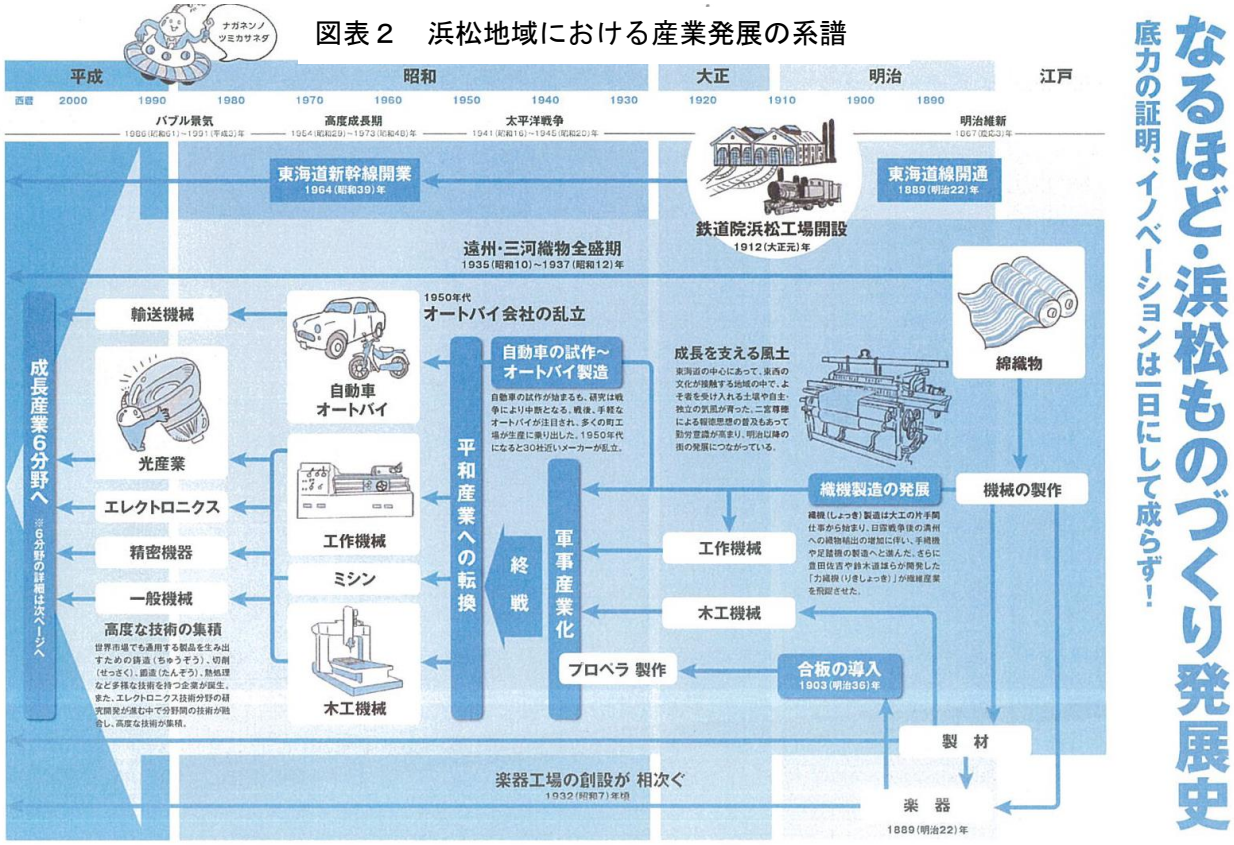
脚注

6　平田　勉（2012）　25~28 ページ

7　Jane Jacobs（1984）, 邦訳 222～228 ページ、234～244 ページ

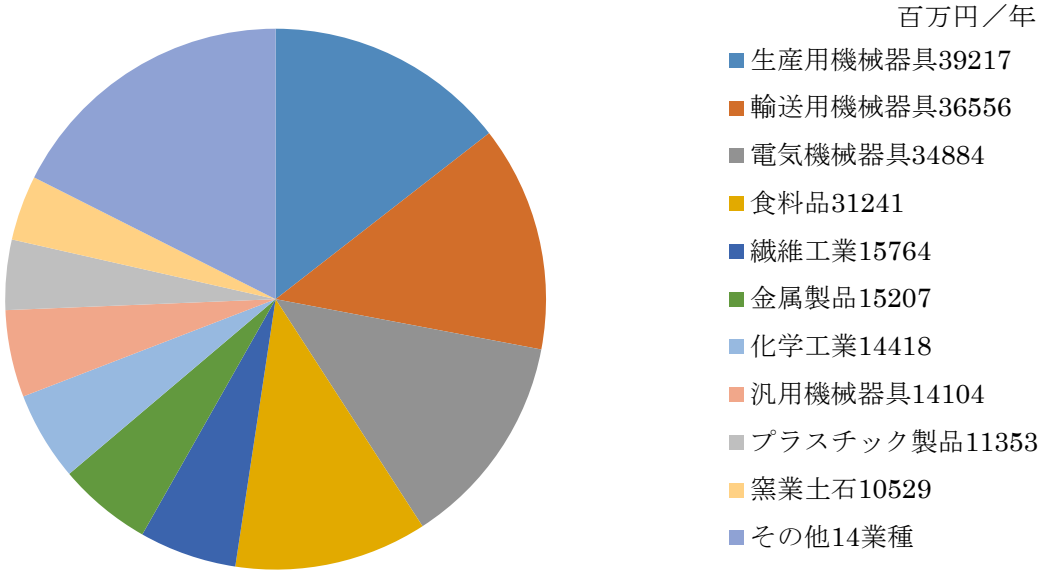
8　貝原潤司（2013）

図表２　浜松地域における産業発展の系譜



＜出所＞浜松市（2015）　5 ページ

図表３-１　福山市の産業別付加価値額①（２０１２年）



＜出所＞福山市「福山市の工業」を筆者が加工

（注１）付加価値額については、従業員２９人以下は粗付加価値額

粗付加価値額＝製造品出荷額等―原材料使用額等―（消費税を除く内国消費税額＋推計消費税額）

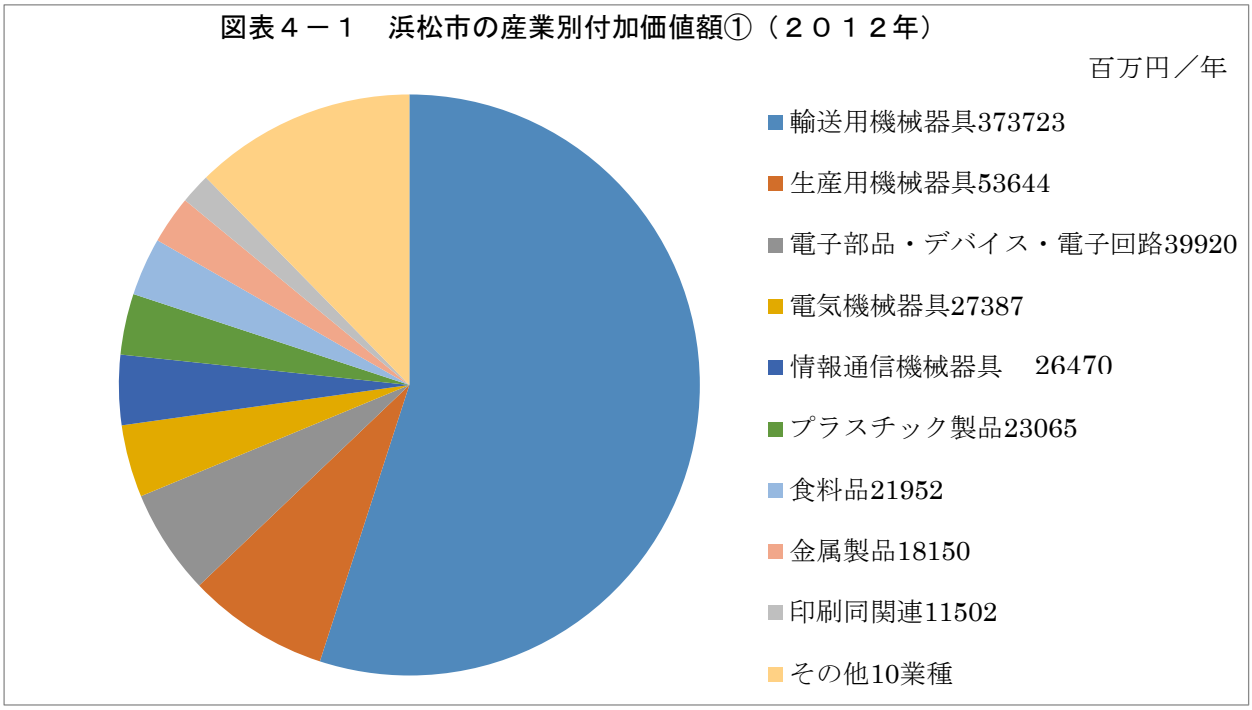
付加価値額＝製造品出荷額等＋（製造品年末在庫額―製造品初期在庫額）＋（半製品及び仕掛品年末価額―半製品及び仕掛品年初価額）－（消費税を除く内国消費税額＋推計消費税額）－減価償却

（注２）事業所数は従業者４人以上の事業所

図表３－２　福山市の産業別付加価値額②（２０１２年）

事業所数(事業所)、従業者数(人)	付加価値額（百万円）
生産用機械器具[184事業所　4,120人]	39,217（14.5%）
輸送用機械器具[91事業所　2,707人]	36,556（13.5%）
電気機械器具[65事業所　3,679人]	34,884（12.9%）
食料品[117事業所　3,670人]	31,214（11.5%）
繊維工業[219事業所　3,766人]	15,764（ 5.8%）
金属製品[146事業所　2,201人]	15,207（ 5.6%）
化学工業[14事業所　619人]	14,418（ 5.3%）
汎用機械器具[49事業所　1,922人]	14,104（ 5.2%）
プラスチック製品[62事業所　1,824人]	11,353（ 4.2%）
窯業土石[30事業所　665人]	10,529（ 3.9%）
その他14業種	47,580（17.6%）
合計　[1,297事業所　38,032人]	270,826(100.0%)

図表４－１　浜松市の産業別付加価値額①（２０１２年）



図表４－２　浜松市の産業別付加価値額②（２０１２年）

事業所数(事業所)、従業者数(人)	付加価値額（百万円）
輸送用機械器具[464事業所　24,401人]	373,723（55.0%）
生産用機械器具[267事業所　6,967人]	53,644（ 7.9%）
電子部品・デバイス・電子回路[47事業所　2,573人]	39,920（ 5.9%）
電気機械器具[122事業所　4,457人]	27,387（ 4.0%）
情報通信機械器具[17事業所　3,177人]	26,470（ 3.9%）
プラスチック製品[163事業所　4,180人]	23,065（ 3.3%）
食料品[165事業所　5,743人]	21,952（ 3.2%）
金属製品[245事業所　4,779人]	18,150（ 2.7%）
印刷同関連[７2事業所　1,679人]	11,502（ 1.7%）
その他10業種	83,887（12.4%）
合計[2,244事業所　72,349人]	679,799(100.0%)

図表５　福山・浜松産業系譜・風土比較

比較側面	福山	浜松
藩関連	・譜代 ・周囲は外様で占められていたため、外部に頼らず自分達で結束した ・福山藩が廃止されたことによって、地方政府となったかつての外様であった安芸広島とは一線を画し、あたかも自分達を「独立している地域」であるような意識	・譜代 ・周囲は譜代で、浜松城は出世城といわれ、藩主は頻繁に国替えになり、江戸で出世した. ・藩士は藩主と共に去り、新しい藩士が来た。藩校は藩主が代われば藩校も去り、新しい藩校が出来た ・国替えによって、支配層と知識層がごっそり入れ替わった。 ・明治になって浜松県が出来たが、すぐに静岡県に統合され、浜松は県をあてにせず、独自に政策を立てる能力が備わった
外からの流入	・ほとんどなし ・近代移行後、日本化薬、三菱重工、ＪＦＥ、シャープなどが進出	・大正時代鉄道院浜松工場を誘致、200 人近い技術者が東京などから流入し人材供給 ・ローランドの大阪からの進出 ・創業者の 25%浜松の外からの出身（山葉（ヤマハ）：和歌山、鈴木修（スズキ）：岐阜）
企業間競争	・同じ土俵に上らず、地域ではオンリーワン、地域外ではナンバーワンを目指す	・同じ業種に必ずライバルが現れ激しい競争になり最後に数社残るが、残った者同士も激しく競争する （バイク：ホンダ、スズキ、ヤマハ、楽器：ヤマハ、カワイ、小型自動車：ホンダ、スズキ、木工機械：庄田鉄工、平安コーポレーション）

比較側面	福山	浜松
事業の転換	（１－２福山の産業系譜参照） ・技術を蓄積し、部品生産にとどまらず、その生産のための工作機械などを開発するなど、川中から川上へ遡上するマザーマシン化	・日本楽器（ヤマハ）～ピアノフレームの鋳造技術が自動車エンジンのシリンダーブロックの精密アルミ鋳造に応用 ・織機、木工産業の技能と、鉄道院浜松工場の技術と、浜松高等工業の理論が合体し浜松産業に影響 ・ヤマハ：楽器木工技術を飛行機の木製プロペラに応用 ・織機技術の二輪車エンジンへの応用（ホンダ、スズキ） ・歩兵 67 連隊、帝国製帽の機械設備の修理から自ら工作機械を開発。 ・輸入に頼っていた制裁鋸を国産化（天龍製鋸） ・鉄道院浜松工場が輸入・国内他社に依存していた工作機械を内製化（←第一次大戦で入手困難化） ・第二次大戦戦時体制に入り壁の増産に伴い工作機械需要が急増したことから、遠州織機（現エンシュウ）、鈴木式織機（現スズキ）をはじめ織機メーカーが次々に工作機械製造に参入
庶民金融	・義倉～文化元年（1804）飢饉等発生時の民間救済機関として発足 ・現在は（財）義倉として助成金交付（伝統地場産業振興等）	・講の発展 ・同心遠慮講（浜名郡北浜町）は現存

＜出所。）竹内宏編(2002)から筆者作成

（注）アンダーラインは福山・浜松と共通部分、二重線アンダーラインは福山と浜松が正反対

図表６　隠岐と海士町・島前高校地図

＜出所＞朝日新聞　DIGITAL「離島から大学へ『町営塾』島根・隠岐諸島の海士町」2010 年 2 月 15 日
http://www.asahi.com/edu/tokuho/tky201002150163.html

図表７　福山城

1622 年（元和 8 年）水野勝成が備後 10 万石の領主となって築いた福山城
伏見櫓、筋鉄御門は共に国の重要文化財（福山観光協会ホームページより）

＜参考文献＞

書籍

浜松市(2015)「市政情報誌あかるい浜松 Vol.8」『なるほど・浜松ものづくり発展史』
平田勉（2012)「福山琴の『わざ』と文化～備後ものづくり考～」英工社
Jane Jacobs　(1985) ,*CITIES AND THE WEALTH OF NATIONS Principles of Economic Life*,Vintage Books,(中村達也訳(2012)「発展する地域　衰退する地域」筑摩書房)
竹内宏編(2002)　「『浜松企業』強さの秘密」東洋経済新報社
山内道雄著(2007)「離島発　生き残るための 10 の戦略」NHK 出版

新聞

貝原潤司(2013)「地方からのオンリーワン、カイハラ②地元産『かすり』の技術応用」日本経済新聞　2013年4 月8日付

ホームページ

福山市　「平成24年工業統計調査結果報告書」
http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/soshiki/johokanri/26090.html
(2016年12月31日アクセス)

浜松市　「平成24年工業統計調査結果報告書」
http://www.city.hamamatu.shizuoka.jp/gyousei/library/cyousakekkasyo/6_kougyoutoukeicyousa/cyousakekka/024_h24_kougyoutoukeichousa.html
(2016年12月31日アクセス)